

時の液化

佐々木 佳子 青森

ころな、かをころころ笑ふ幼な子のマスクがずれてまたまた笑ふ
「春望」と重ねてわれも白髪ふえワクチン待てば夏至が近づく
「人流」はジュラルミン的硬さもつ耳にも目にも生ずる痛み
カッコウの声にのせられ全身で梅シロップの大瓶ゆらす
青梅と氷砂糖の密がいい 時の液化がゆるりとすすむ

たてがみのむかう

丹下 美雪 群馬

カーナビがなくてまよひてゆきどまる芍薬ゆるる田のはたの道
紹介状持参せぬこと責められてもう行かぬ近き病院なれど
歩様よき栗毛の馬のたてがみのむかうに麦の秋はひろがる
ジャージー牛の黒目くりくり懐こくて手ぶらの我と見ても寄りくる
赤はまだ黒は食べごろ桑の実にもろ手のばせば夕日まばゆし

われの小呆け

中津川 勸坐 埼玉

箱根にてくつろぐ妻よ歳をかさね君は「湖畔」のひとより佳いね
警察で認知機能を調べられわれの小呆けはデータとなりぬ
父のくれた狸々袴あを垣のかげに根づきて元気かと咲く
群すずめさざめく夕べ舶来のコロナワクチンままよと打てり
英吉利ゆ来たウイルスと白耳義ゆ来たワクチンの軍場いくさばぞこの身

ささやかな浄

朝比奈 美子 千葉

母の郷、鶴見訪はむとゆく道のかなたに浮かぶしらあを白青の富士
総持寺の屋根見て登る高台に母の通ひし女学校あり
若葉風めがねに受けて銅像の校長先生はつか微笑む
「国道駅」改札口をぬくるとき沈黙したりははもわたしも
コロナ禍の世に咲きいでて水色のをさなあぢさるささやかな浄

森へ近づく

中村 敬子 東京

竹の葉をはこぶパンダの口許に肉食獣の犬歯ひかれり
ドッグフードふやけるまでを嬉々と待つ犬歯の抜けた白いプードル
朝靄はなにかの扉おほかみに許しをもらひ森へ近づく
逆縁はもう無き今よきしきしと介護の日々の悔いはあれども
絵筆持ちどうだ？と父が聞いてくる すごいねえ西の空の彩雲

西太后の付け爪

立花 純子 新潟

石垣に春の光が吸ひ込まれかすかに石が軟化し始む
枯れ色の茅の株から西太后の付け爪のごとき新芽の出で来
清朝の西太后の指甲套におそれをのきし女官ありけむ
亡き父の誕生日近き日曜日夫と小梅を収穫したり
二千粒ほどの小梅をていねいに洗ひてへ夕を楊子でとりぬ

メロンソーダ

早川 晃 央* 富山

帰路にすれ違う東京行きバス「キラキラ号」は闇に消えゆく
牧草を踏み食み生きる牛を見る牛とおなじ時を生きてる
ストローを噛みつつメロンソーダ吸う君との夏は一度きりだった
リコピンが身にしみる生徒指導後の十二時過ぎの夕餉のトマト
ふわふわと海からの風さわさわと揺れる木々はらはらと花びら

柚子坊

松本 由利 静岡

少年の眼のやうなうすあをき紫陽花ひとつ机に置けり
五ミリから四センチまでの柚子坊を二十四匹付ける金柑
金柑の新芽勢ひよく伸びて六月半ば柚子坊育つ
キッチン朝の空気は静かなり梅の実ひとつ熟るる香はして
梅の実の熟るる香りはうつくしき風となりたり昼を夕べを

赤いリュック

山田 恵 里 愛知

「子のため」とふ大きな盾をかぶせられ子はさまよへりみづからの裡
二十年前の娘を抱きしめて目覚めき心弱りたる今朝
薄つぺらいのの字ばかりを見せてゐるロールケーキのパックの不本意
雨に濡れ銀の自転車曳いてゆく赤いリュックのいつまでも赤
なにもかもクリアファイルに挟み置き右へ右へと解決は延ぶ

山陽百貨店

吉 本 由 美 大 阪

「ごはんなにたべる」と声して真昼まの公園時間ゆるびはじめぬ
アルⅡカポネの真似して指に挟みつつ葉巻のかたちのクツキーかじる
行きしことないが五月の青葉人あつめてをらむ山陽百貨店
研ぐことをやめたる手もて炊飯器に無洗米おとす風の音たて
父似から老いて母似のこまり顔かがみに映り姉に似てくる

みちのくの風

小 坂 喜久代 兵 庫

用無しは日々ひつそりと生きゆくに連続ドラマのヒロインは老ゆ
歌会前の輪読会は「北窓集」みちのくの風神戸を包む
パソコンの中の紳士にまた勝つたけふ五回目の神経衰弱
「元町駅にエレベーターをJ R殿」肺病むわれと膝病む友に
寝転びて読むには重し「戻り川心中」もう少し若ければなあ

青葉木菟のこゑ

吉 里 幸 雄 福 岡

朝一に梅干し食べては顰めたるかの日にもどれぬ恍惚の汝よ
着せ替への人形のやうにはゆかぬなりシャツに両腕通すにも 噫
ヨーグルト一匙ひとさじはこびやるわらはべのごと開ける口に
かがまれば日の斑がちろちろ遊びるし紫蘭の花の不純なき白
ねむりたる汝の入歯をあらふ宵いはむかたなき青葉木菟のこゑ